

報 文

大学における女子学生の性の健康を支える取組みの現状と課題

小野寺 梓^{*1} 橋本 紀子^{*2}

Present Status and Problems with University Sexual Health Services for Female Students

Azusa ONODERA^{*1} and Noriko HASHIMOTO^{*2}

Among female university students, the rate of sexual intercourse experience has been increasing year after year. Under such circumstances, it is important to provide the students with appropriate sexual health services. The purpose of this study was to clarify the necessary sexual health services and the present status of these services, and to make proposals to support the sexual health of female university students.

Firstly, in order to investigate the sexual health services which female students need, questionnaires were distributed to female university students in the Kanto region, and 255 responses were received (the response rate: 52.9%). 131 students at a women's university and 93 students at a coed university were selected and analyzed using the chi-squared test. Female students who had experienced sexual intercourse reached 54%. Of those, 42% had sexual trouble after entering university; this rate of those who had experienced sexual intercourse was significantly higher than those who had no experience ($p < 0.001$). About 95% of them did not need hospital services but rather consultation offices where they could easily visit; for example, a university consultation office where a female doctor is regularly assigned and a university outpatient clinic only for women. About 91% of female students require correct information about sexual issues, and a university health center is the most desirable place to obtain this information. These results showed that most of the female university students needed sexual health services at the university, and university health center was the most important place to offer those services.

Secondly, for the purpose of understanding the present status of sexual health services, a questionnaire investigation into university health centers was conducted and 89 responses were received (the response rate: 51.4%). In addition, 9 centers were also interviewed. About 70% of the centers make some effort to support the sexual health of female students. Of these centers, about 60% place booklets including information about sexual issues; while centers which perform gynecological care by a female doctor were less than 30%. At a university health center, public health nurses introduce clinics where a female doctor works with students or distributes their own booklets to them. These efforts by healthcare providers are important for supporting the sexual health of female students; however, some centers cannot make these efforts because of staff shortage or a lack of understanding from the universities. It is essential that university administrators show an understanding of the sexual health of their students.

1. 緒 言

現在、大学生は年々その進学率が上昇しており（平成19年度大学・短期大学進学率 53.7%）¹⁾、見過ごすことができない大きな集団となっている。

その大学生の性交経験率は2005年の日本性教育協会の全国調査²⁾によると、男女ともに60%と年々上昇し

ており、またその値は大学4年間の内に急激に上昇していくことも先行研究から明らかになっている^{3, 4)}。しかし、性行動を始めることは性に関する悩みや不安も生じさせる。特に女性は妊娠する性であり、望まない妊娠への不安は、自身の身体に直接起こる変化として男性よりも強く感じ得る。また性交経験に拘わらず、月経に関する問題、月経不順や月経痛、月経前症候群（PMS）など

^{*1} 八王子市保健センター：Hachioji City Health Center

^{*2} 教育学研究室，女子栄養大学：Laboratory of Education, Kagawa Nutrition University

で悩んでいる女子大学生も多くいることが予想される。

そのような女子大学生の性の健康を支えることが必要であるが、婦人科を受診することにためらいを持つ人も多く、悩みを一人で抱えたり、問題を放置したりすることもある。また、剣の調査⁵⁾では、6割以上の大学生が「性に関して正確な情報を得たいと思ったことがある」と答えたが、「そのような情報源が身近にある」と答えた学生は約4割程度しかいなかった。

しかしこのような状況の下で、彼女たちが性の問題に関してどのような相談場所を求めているのかについて、具体的に研究されたものは少ない。このことから、女子大学生が求めている性の健康を支えるサービス、そしてそのサービスの現状について研究することが必要であると考えた。

2. 研究目的と研究方法

2.1 研究目的

- ①：A. 女子大学生が持つ性の悩みの現状、B. 女子大学生が求める性の健康を支えるサービス、この2点を把握する。
- ②：①-Bの「現状」を明らかにし、女子大学生の要求との比較から、課題の抽出及び改善策の提言を行なう。

2.2 研究方法

量的調査（質問紙調査）と質的調査（聞き書き調査）を併用した。研究目的と作業課題との関連を図1に示す。具体的には、作業課題①として関東圏の2～4年生の女子大学生に自記式質問紙調査を実施し、作業課題②・③として、作業課題①の結果から「女子大学生が求める性の健康を支えるサービス」の実施機関として、大学の保健管理センター等を選定し、自記式質問紙調査及び聞き書き調査を実施した。

2.3 倫理的配慮

倫理的配慮として、全ての調査に於いて女子栄養大学医学倫理審査委員会の承認を得てから実施し、質問紙調

査は無記名で行ない、答えたくない質問には答えなくともよいことを明示した。

3. 女子大学生の性の健康に関する現状と要望（作業課題①）

3.1 調査目的

- ①女子大学生が持つ性の悩みの現状、②女子大学生が求める性の健康を支えるサービス、この2点を把握する。

3.2 調査方法

- (1) 調査方法：予備調査を元に作成した自記式質問紙にて質問紙調査を実施した。質問項目は本研究と類似した先行研究がないため、関連のある研究を参考にしな

研究目的

- ① A. 女子大学生が持つ性の悩みの現状
B. 女子大学生が求める性の健康を支えるサービス、の2点を把握する。
- ② ①-Bの「現状」を明らかにし、女子大学生の要求との比較から、課題の抽出及び改善策の提言を行なう。

目的①に対し

作業課題①

関東圏の女子大学生に対し、自記式質問紙調査を実施

作業課題①の結果より、女子大学生が求める「性の健康を支援するサービス」の実施機関として「大学の保健管理センター等」を調査対象に選択。

目的②に対し

作業課題②

大学保健管理センター等への自記式質問紙調査を実施

作業課題③

大学保健管理センター等への聞き書き調査を実施

図1. 本研究の研究目的と作業課題の関連図

表1 女子大学生に対する質問紙調査の枠組み

大項目	小項目	質問番号
基本属性	学年、年齢、居住形態、大学に来る頻度	1, 2, 3, 4
性の健康に関わる知識	子宮頸ガンの検診開始年齢、子宮頸ガンの原因、緊急避妊法、自分で検査するSTD・子宮頸がん検査キットの販売、低容量ピル	5, 6, 7, 8, 9
性行動	性交経験の有無、妊娠検査薬の使用、コンドームの使用頻度、緊急避妊用ピルの使用、自分で行なうSTD・子宮頸がん検査キットの使用	10, 13, 14, 15, 16
性交に伴うリスク認知	STDリスク認知、STDに感染しないと思う理由、望まない妊娠リスク認知	11, 12
性についての悩み	性に関して困った経験、性に関して困った事柄	17
性の悩みについての相談行動の実態	相談行動の有無、相談相手、相談しない理由	18
婦人科受診について	婦人科受診への抵抗	19
性に関する相談場所について	相談場所を求める気持ちの有無、求める相談場所	20
性に関する正しい情報について	正しい情報を求める気持ちの有無、求める情報入手先	21
性に関する保健医療サービスについて	求める性に関する保健医療サービス	22

がら独自に編成した。

- (2) 調査枠組み：表 1 に示すように 10 の大項目を設けた。

大項目の「性についての悩み」「性の悩みについての相談行動の実態」が一つ目の調査目的に対応している。この 2 項目との関連を予測し組み込んだ項目として、基本属性の居住形態、また大項目の「性行動」「性交に伴うリスク認知」がある。「居住形態」については、一人暮らしか親との同居かの違いで、性に関して困ったときに誰に相談をするかに影響する可能性もあると予想した。「性行動」「性交に伴うリスク認知」は「性についての悩み」に影響を及ぼしてくると予想した。

次に、大項目の「性に関する相談場所について」「性に関する正しい情報について」「性に関する保健医療サービスについて」は、二つ目の調査目的に対応している項目である。これらに影響を与えるものとして、「婦人科受診の抵抗について」「性の健康に関わる知識」を組み込んでいる。具体的には、婦人科受診への抵抗から病院とは異なる相談場所を求めるのではないかと、という事と、子宮頸がんの知識や低容量ピルの認知などが求める保健医療サービスに影響を与えると予想した。また、大学に来る頻度により、学内で受けられるサービスと学外で受けられるサービスのどちらを求めるかに違いがあると予想し、基本属性に組み込んだ。

また、本調査内容は自身のプライベートな性に関する内容を含んでいるため、答えにくいと感じる対象者もいると考えられたので、質問項目は調査したい項目のみに限定した極力少ないものとした。

- (3) 質問紙の配布：調査大学の教員に依頼し、回収は集合法、郵送法、留置き法で実施した。
- (4) 調査期間：2008 年 5 月～6 月
- (5) 調査対象の選定：質問紙の内容から無作為抽出により選定した大学からの協力は得られにくいと判断し、機縁法により選定した関東圏の女子大学 2 校、共学大学 6 校の 2～4 年生を対象とした。関東圏に限定した理由は、調査に協力可能な大学が関東圏に集中しているためでもあるが、関東圏は大学数も多く、全国から学生が集まってきているため、関東圏に限らない多様な地域性を持つ学生も多くその点からも妥当であると考えた。女子大学、共学大学と分けた理由は、女性だけの学内環境と男性も混在する学内環境では、求める相談場所などに違いが現れるかもしれないと考えたためである。また、学年を限定した理由は大学生になってからの出来事を調査するため、入学したばかりの 1 年生は対象にしないこととした。
- (6) 回収結果：全体で 482 部配布し（女子大 267 部、共学大 215 部）、255 部回収した（女子大 152 部、共学大 103 部）。回収率 52.9%。
- (7) 分析方法：回収された 255 部の内、25 歳以上の者、無回答の項目がある者を除外した 224 名を分析対象と

した。分析は主に女子大学と共学大学に分けたクロス集計と、性交経験あり群と性交経験なし群に分けたクロス集計を行ない、有意差を検討した。統計処理には統計解析ソフト SPSSver.16.0 を用い、検定には χ^2 検定を用いた。なお、有意水準は 5%未満とした。

3.3 結果・考察

(1) 対象者の属性

女子大学学生 131 名、共学大学学生 93 名であり、平均年齢は 20.24 ± 0.94 であった。性交経験者は女子大 67 名 (51.1%)、共学大 54 名 (58.1%) であった。全体では、121 名 (54%) と半数以上の学生が性交経験を持っていることが分かった。先行研究²⁾の 60%と比べるとやや低い結果となった。

大学に来る頻度は週 4 日以上が女子大 (100%)、共学大 (86.0%) とほとんどを占め、勤勉な学生が多いことが窺える。また、居住形態は親と同居の者が全体で約 7 割であった。この居住形態と性交経験をクロス集計したところ、表 2 に示すように一人暮らしの学生の方が親と同居している学生よりも性交経験がある者が有意に多い結果であることが分かった ($p < 0.05$)。大学で性交経験者が増える背景に、親元から離れ、自由な生活ができるようになることも挙げられると言える。

表 2 居住形態別に見る性交経験

N=213		性交経験		合 計
		あり	なし	
一人暮らし	N (%)	36 (65.5)	19 (34.5)	55 (100)*
親と同居	N (%)	78 (49.4)	80 (50.6)	158 (100)
合 計	N (%)	114 (53.5)	99 (46.5)	213 (100)

$$\chi^2 = 4.425, P = 0.039, *p < 0.05$$

(2) 性の健康に関する知識

性の健康に関する知識を問う 5 項目において、大学種別に分析したところ、表 3 に示すように子宮頸がんの検診開始年齢と子宮頸がんの原因、低用量ピルについて問う項目で、女子大学の学生の方が共学大学の学生よりも有意に「知っている」と答えた割合が多い結果となった。このような背景として、女子大学の学生は家政系学部や養護教諭養成学科の学生が多いため、授業で勉強した可能性、大学が情報提供を行なっている可能性、元々健康意識が高い学生が多い可能性が考えられた。

(3) 性についての悩み

大学生になってから性に関して困った経験の有無を尋ねたところ、95 名 (42.4%) の学生が困った経験を持っていた。これを性交経験別に見たところ、表 4 に示すように性交経験がある者は大学生になってから性に関して困った経験が有意に高い結果となった ($p < 0.001$)。このことから、性交経験者が増える大学生へのケアが必要であると言える。

また、その性に関して困った経験がある 95 名に対し、

表3 大学種別から見る性の健康に関する知識

		女子大 N=131	共学大 N=93	全 体 N=224	χ^2	P 値
頸ガン健診年齢	知っている	40 (30.5)	14 (15.1)	54 (24.1)	7.124	0.008 **
	知らない	91 (69.5)	79 (84.9)	170 (75.9)		
頸ガンの原因	知っている	85 (64.9)	32 (34.4)	117 (52.2)	20.248	0.000 ***
	知らない	46 (35.1)	61 (65.6)	107 (47.8)		
緊急避妊用ピル	知っている	108 (82.4)	75 (80.6)	183 (81.7)	0.118	0.732 n.s
	知らない	23 (17.6)	18 (19.4)	41 (18.3)		
低用量ピル	知っている	116 (88.5)	69 (74.2)	185 (82.6)	7.795	0.005 **
	知らない	15 (11.5)	24 (25.8)	39 (17.4)		
STD・頸ガン検査 キットの販売	知っている	26 (19.8)	15 (16.1)	41 (18.3)	0.503	0.478 n.s
	知らない	105 (80.2)	78 (83.9)	183 (81.7)		

p<0.01 *p<0.001

表4 大学生になってから性に関して困った経験（性交経験別）

		性に関して困った経験		合 計	χ^2	P 値
N=224		あり (N=95)	なし (N=129)			
性交経験	あり N (%)	68 (56.2)	53 (43.8)	121 (100)	20.481	0.000 ***
	なし N (%)	27 (26.2)	76 (73.8)	103 (100)		

***p<0.001

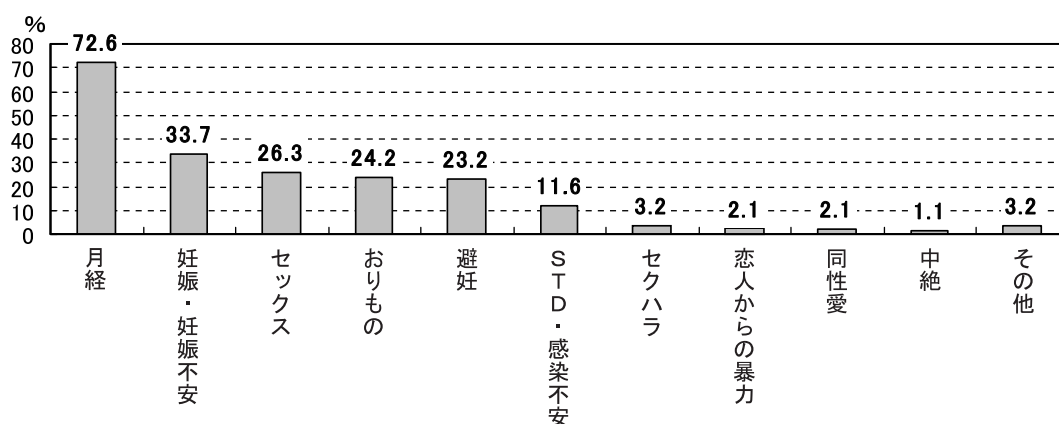


図2. 性に関して困った内容

困った事柄を複数回答で尋ねたところ、図2に示すように、「月経」が最も多かったが、次いで「妊娠・妊娠不安」、「セックス」、「おりもの」、「避妊」など性交経験から来る悩みが挙げられていた。また少数ではあるが「セクハラ」「恋人からの暴力」「同性愛」「中絶」といった事柄も挙げられており、このような事柄へのケアや配慮も必要であることが示唆された。

(4) 相談行動と婦人科受診抵抗

大学生になってから性に関して困ったことがある者95名に、その時誰かにその事を相談したかどうかを尋ねたところ、全体で7割以上の者は相談をしていた。相談した相手複数回答で尋ねたところ、「友人」が46名(66.7%)と最も多く、次いで「恋人」28名(40.6%)、「親」25名(36.2%)であった。関連すると思われる、

親と同居の有無で「親」に相談するかどうかについては有意な差は見られなかった。性に関する悩みは同じ屋根の下に住んでいようがいまいが、親には相談しにくい問題であり、友人は女子大学生にとって悩みを分かち合える相手として大きな位置を占めていると言える。

一方、「病院」に相談した(受診した)者は9名(13.0%)であり、また、学内の健康管理部署である保健管理センター等に相談をしている者は誰もいなかった。身近な関係の中で問題を解決しており、本当の解決が得られているのかどうかについて疑問が残る。

一方、相談をしなかった理由として、相談をしなかった26名の内、困った事柄として「月経」のみ挙げている8名中7名は、その理由を「相談するほどではなかった」としている。しかし、「恥ずかしい」や「見損なわ

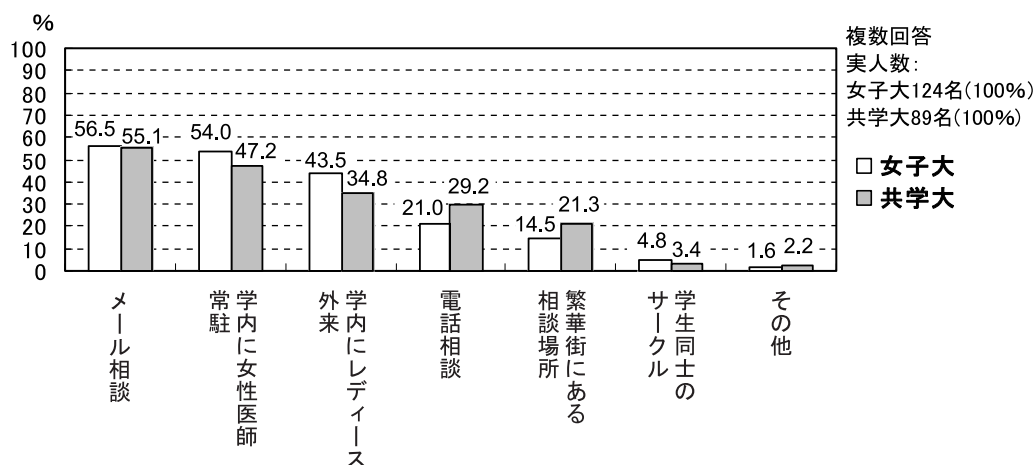


図3. 女子大学生が求める性に関して気軽に相談できる場所

れる」「怒られる」の理由で相談をしなかった者は、「月経」の他に「セックス」「性感染症・感染不安」「避妊」「妊娠・妊娠不安」などの事柄も複数選択しており、性交経験から来る悩みを相談することに対し、怖れを抱いているような様子が窺えた。

また、婦人科受診の抵抗については、「非常にある」「少しある」と答えた学生を合わせると168名(75%)であった。性交経験の有無で有意差は見られず、ほとんどの女子大学生が婦人科受診に抵抗を感じていることが分かった。この結果は山内ら⁶⁾が行った調査結果とほぼ一致している。

先行研究より明らかにされている、女子大学生が婦人科受診の際に抱く不安の内容であるが、前田らの調査⁷⁾では、産婦人科未受診者の方が受診経験者よりも受診に対し抵抗を強く感じ、その受診に対する不安の内容として、未受診者の約7割は「男の医師による診察」「性器・胸を露出したり触られる」「診察の内容」に対し不安を抱いていた。しかし、受診経験者でその内容に不安を感じるものは約3～4割であった。また、受診後の思いとして約6割は「安心した」と答えていたことから、受診前は不安が大きくとも実際受診してみると安心できるということが窺える。

また、未受診者の約7割は「同性の医師」「危機的状況なら」産婦人科を受診しようと思う、と答えており、前述の山内らの調査⁶⁾では、産婦人科を受診する際に病院を選ぶ基準として「相談しやすい雰囲気」72.2%、「職員の対応がよい所」55.1%、「職員が女性の女性総合外来のような所」48.7%が多く挙げられていた。

これらの結果より、婦人科を若い女性が入り易い、相談しやすいと感じる雰囲気にする工夫は元より、何か心配事があった学生に対し婦人科への不安を和らげ(例えば女性医師がいる病院を紹介したり、どのような診察があるのか説明したりなど)、また性交経験から来る悩みを後ろめたく感じている者に対しても受診の後押しを支援するような存在が必要であると言える。

(5) 性に関する相談場所について

性の問題に関して、病院とは異なる気軽に相談できる相談場所があるかと思うか尋ねたところ、あったらいいと思う者が全体で213名(95.1%)とほとんどであった。その213名に、どのような相談場所がよいか複数回答で尋ねたところ、図3に示すように「メール相談」が最も多く、次いで「学内に女性医師が常駐する」、「学内にレディース外来を設ける」が挙げられていた。

若者にとって携帯メールは日常になくてはならないものとなっており、メール相談は携帯またはパソコンを用い、自分がその場に行かなくとも相談できる手軽さ、顔が見られない安心感ということが要望が高くなる背景の一つとして考えられる。また、女性医師への要望は、話しにくい身体のデリケートな相談などは同性の方が話し易いということから高くなったことも予想され、レディース外来についても、訪れるのは女性だけである安心できる場所ということから要望が高くなったことも一因として考えられる。

このような支援を行う場所として保健管理センター等が考えられるが、実際に性に関して困った時に保健管理センター等に相談した者は1人もいなかった。しかし、学外に相談場所を求めるのではなく学内への要望が高ことから、学内での支援に期待を寄せている様子が窺われる。学内において女子学生が気軽に相談ができるような場所の充実が必要であると言える。

また、「電話相談」や「繁華街にある相談場所」などの学外での相談は共学大の学生にやや多くなっていた。この結果から共学大の学生は、男子学生を意識するため学外の相談場所への要望が女子大の学生よりも多くなった可能性も考えられた。

一方、婦人科に対する抵抗感から病院とは異なる気軽に相談できる場所を求めている学生が多いのではないかと、という仮説を検証するために、婦人科受診に対する抵抗と、人数が少なかった「学生同士のサークル」を除く相談場所をクロス集計した結果を表5に示す。有意差は見られないが、婦人科受診に抵抗がない者の方が、「メール相談」「電話相談」の顔が見えない、実際に受診しな

表5 要望のあった相談場所別に見る婦人科受診への抵抗

		婦人科への抵抗			P 値
		あり群 N=160	なし群 N=53	全 体 N=213	
メール相談	N (%)	87 (54.4)	32 (60.4)	119 (55.9)	0.274 n.s
電話相談	N (%)	36 (22.5)	16 (30.2)	52 (24.4)	0.172 n.s
学内に女性医師常駐	N (%)	85 (53.1)	24 (45.3)	109 (51.2)	0.203 n.s
学内にレディース外来	N (%)	64 (40.0)	21 (39.6)	85 (40.0)	0.547 n.s
繁華街にある相談場所	N (%)	30 (18.8)	7 (13.2)	37 (17.4)	0.242 n.s

検定は Fisher の直説法による

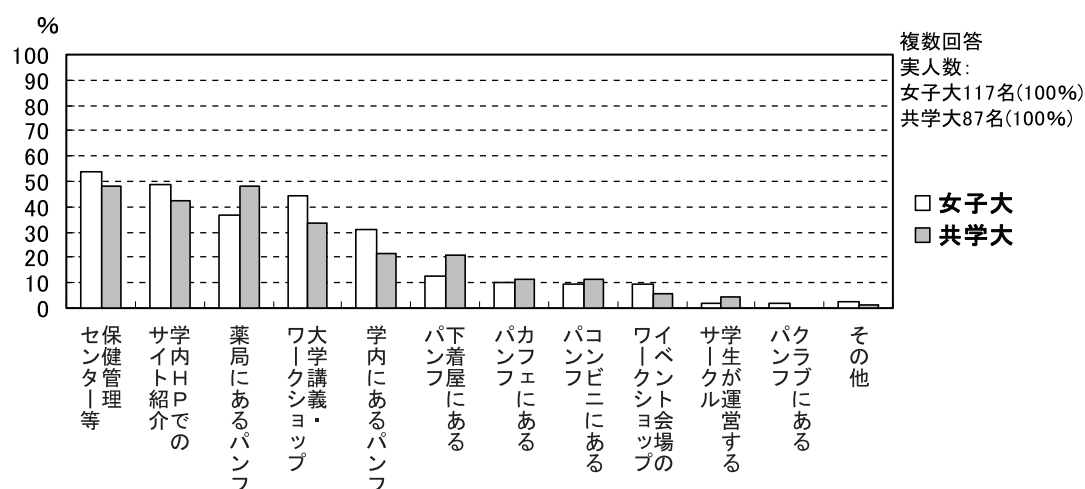


図4. 女子大学生が求める性に関して正しい情報の入手先

くとも相談できる場所を選択した割合が若干高く、逆に抵抗がある者の方が「学内に女性医師が常駐する」「繁華街にある相談場所」の顔が見える相談場所を選択している割合が若干高くなっていた。

このことから、この仮説は否定されたが、抵抗がない者は婦人科に行けば問題は解決するため、メールや電話相談など実際に受診しなくても相談できる場所を選択し、逆に抵抗がある者は婦人科に行きづらいために、病院とは異なるが実際に顔を合わせて相談にのってもらえる場所を選択している可能性も考えられた。

(6) 性に関して正しい情報の入手先について

性に関して科学的に正しい情報が欲しいと思うかどうかを尋ねたところ、欲しいと思う者は全体で204名(91.1%)であった。この204名にどのような場所から性に関する情報が入手できればよいか、複数回答で尋ねたところ、図4に示すように、共学大では「保健管理センター等」と「薬局に置いてあるパンフレット」が同じ割合で並ぶなど学外から情報を入手することも求められているが、全体として最も多かったものは、「保健管理センター等」で、次いで「学内HPで正しい情報を提供しているサイトを紹介する」であった。相談場所の結果と同じように、全体として大学内で情報を得たいと思っている学生が多いことが示され、大学において性の健康

を支えることは有効であることが示唆された。また、本調査の対象者のほとんどは週4日以上大学に来ており、そのことも学内におけるサービスを求める結果につながっているのかもしれない。

4. 大学保健管理センター等における女子大学生の性の健康を支える取組みの現状（作業課題②、③）

4.1 調査目的

女子大学生が学内で受けられるサービスを望んでいたことより、サービスの実施機関として考えられる大学保健管理センター等における女子大学生の性の健康を支える取組みの現状を明らかにしていく。

4.2 調査方法

(1) 調査方法：全体の取り組み状況を把握するために自記式質問紙調査を実施した。質問項目は①大学種別、②女性医療職者の常駐の有無、③女子大学生の性の健康のために取り組んでいる内容、④取り組みを行っていない理由、⑤現在の取り組みに対し課題に感じていること、の5点である。

さらに個別で具体的な内容を把握するために聞き書き調査をインタビューガイドによる半構造化面接法にて実施した。

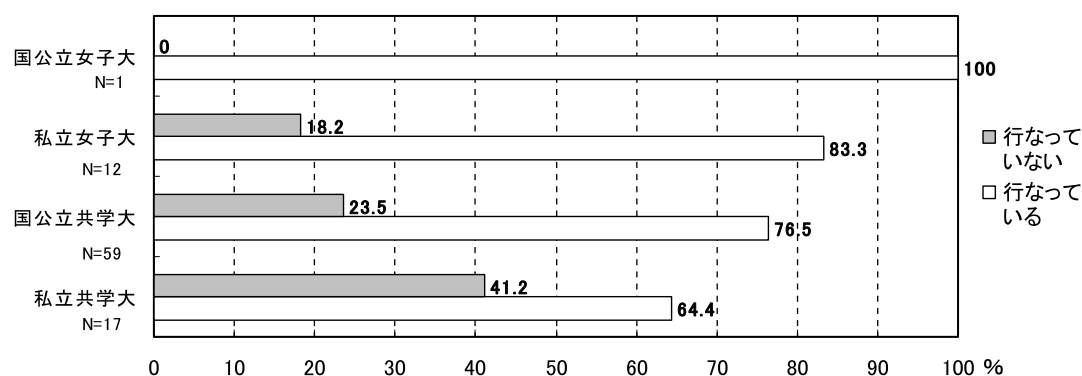


図5. 大学別女子大学生の性の健康を支える取組みの実施状況

(2) 調査期間：2008年8月～9月に質問紙調査を実施し、同年9月～10月に聞き書き調査を実施した。

(3) 調査対象：関東1都6県にある国公立・私立の4年制大学の内、各大学ホームページから健康管理部署の名前を直接確認できた173校に対し質問紙調査を行ない、さらにその中から協力が得られた9校（私立共学大5校内1校は医療系、国公立共学大2校内1校は医療系、カトリック系私立女子大2校）に対し聞き書き調査を実施した。

(4) 回収結果：質問紙の配布と回収は郵送法で行なった。回収結果は173校に配布し、89校回収（回収率51.4%）である。

(5) 分析方法：回収された89校全てを分析対象とし、単純集計を行なった。自由記述による回答はKJ法による分類を用いた。回答内容を1語ずつカードへ書き出し、類似したカードを統合しカテゴリーを作成した。カテゴリー分類の妥当性については、指導教員及び複数の看護師によって検討を行い、ほぼ同様の一致を得た。

4.3 結果・考察

(1) 質問紙調査の結果・考察

①大学の属性

大学の種別は国公立共学大17校、私立共学大59校、国公立女子大1校、私立女子大12校であった。女性医療職者（看護師、保健師も含む）が常駐しているのは77校（86.5%）であり、ほとんどの大学に常駐していることがわかった。大学種別毎に女子学生の性の健康を支えるための取組みを行なっているかどうかを図5に示す。数にバラツキがあり一概に比較はできないが、女子大学は共学大学よりも高い割合で実施しており、女子学生しかいない環境が取組みを行ない易くしている可能性も考えられた。

②女子大学生の性の健康を支えるための取り組み

また、取組みを実施している62校（69.7%）にその内容について複数選択で尋ねた結果は表6の通りである。最も多かった取り組みは「性に関して正しい情報を掲載したパンフレットの設置」（58.1%）で、次いで「コメディカルによる性の問題の相談」（50%）であった。

表6 女子学生の性の健康を支える取組みの実施内容

	複数回答 N=62	
	回答数	人数の%
パンフレットの設置	36	58.1
コメディカルによる相談	31	50.0
女性医師の婦人科以外の診療・相談	23	37.1
性の健康の講話	19	30.6
女性医師の婦人科診療・相談	17	27.4
男性医師の婦人科診療・相談	6	9.7
メール相談	5	8.1
正しい情報を大学HPに掲載	4	6.5
その他	21	33.9

後は3割前後の割合で「女性医師による婦人科以外の診療・相談」「性の健康に関する講話」「女性医師による婦人科診療・相談」が挙げられていた。また、その他の内容としては、「病院紹介」「相談があれば対応」が多かった。

パンフレットの設置は比較的行ない易いサービスであるようだが、それでも行なっている保健管理センター等は約6割である。質問紙調査から浮かび上がった女子大学生の要望を満たし、彼女らの性の健康を支えるためにも、全ての大学の保健管理センター等で情報を提供し、普段からそこに行けば正しい情報が得られることを認識させておくことが必要であると考えられる。しかし、そのような状況の徹底には至っていないようであった。

「コメディカルによる性の問題の相談」は、例えば助産師外来などのように特別に設けているものもあれば、看護師や保健師などのスタッフが相談に来た学生に随時対応する場合もある。今回の調査で約半数の保健管理センター等でしか取り組んでいなかったことは、回答者が助産師外来などのような特別な枠組みで設けているものと捉えた可能性、もしくは、そのような相談が寄せられておらず取り組んでいると回答しなかった可能性が考えられる。実際は学生が保健管理センター等に相談に訪れた時、最初に接するのは医師ではなくコメディカルであるため、このコメディカルが相談に応じるケースが最も

表7 取組みに対して課題に思っている事（自由記述の分析）

N=35

カテゴリー	サブカテゴリー	抽出数	記 述 内 容
学生に関して	知識・意識	8	知識不足, 他人事意識, 学生の理解度の確認, 学生の性意識の把握
	多くの学生への対応	5	多くの学生への啓発, 相談に来ない学生への対応, 学生への PR, 学内で少数の女子学生のニーズを知る, 取り組みに対する学生の認知度の確認
	利用	4	講演に学生が集まらない, 婦人科でも男性医師のため相談少数・キャンセル多い
相談・診療に関して	相談	5	相談時間・場所の確保, 婦人科相談日が少ない, 月経不順・PMS への対応, ハラスメント問題への対応
	医師	4	女性医師の確保, 医師による相談・診療を設ける
運営に関して		7	予算・人手不足
連携に関して		5	近隣の婦人科情報の充実, ネットワーク不足, 女性総合外来をもつ開業医との連携, 学生と教職員全体で性の問題を話し合える取り組みが必要, 教職員・保護者の同意・協力が得にくい
スタッフに関して		4	スタッフの知識不足, 提供する情報の選択, パンフレットの有効な設置
教育に関して		3	授業での取り扱い, STD・避妊についての健康教室の開催, ピアの取り組み
その他		1	男女平等に捉えられる工夫

多いのではないかと予想される。そのため、性の問題にも対応でき、学生が相談しやすいコメディカルが存在は大きいと言えるのではないだろうか。

また、女子大学生への質問紙調査から、女子大学生は学内に女性医師がいることや学内にレディース外来があることを高く支持していたが、女性医師による婦人科以外の診療や相談を行なっている保健管理センター等は約 37%, また女性医師による婦人科の診療や相談は約 27%と低い割合である。結果として、女子大学生の要望は満たされていない現状であった。

③女子大学生の性の健康を支える取組みを行っていない理由

取組みを行っていないと答えた 27 校の保健管理センター等に、その理由を複数回答で尋ねたところ、最も多かった理由は「スタッフ不足」で 63%であった。次いで「女子学生自体が少ない」が約 48%, 「予算の問題」が約 26%であった。大学の保健管理センター等は、校医は常駐せず看護師や保健師などが 1 人で運営している場合も多く、更には女子学生自体が少ない大学では少数の学生に対しての取組みにまで手が回らない現状があるのかもしれない。また、その他として挙げられていた理由で、女子学生が少なく性の話がタブー視されており、何か取組みをしたいと思っても動けない、という意見も少数が見られた。

この例のように女子学生が少ない状況では、学内で性の話がタブー視されてしまうという実情は初めて知った事であった。女子学生が少ない全ての大学で同じような状況があるとは限らないが、例え少数ではあっても、少なくとも 4 年間大学に在学しそれから社会に巣立っていく学生の健康を支えることは重要な課題であると考えられる。そのためには、大学の教職員や運営に携わる者全体へ全学生の健康を支えることに意識を向かせるような取組みが必要になってくると言える。

④行なっている取組みの課題

現在、女子大学生の性の健康を支える取組みを行なっている 62 校の保健管理センター等に、その取組みに対して課題に感じていることを自由記述で回答してもらった。自由記述の分析法については先に述べた通り KJ 法による分類に基づき行なった。その際、「学生に関して」という学生に感じている課題、「相談・診療に関して」という相談・診療の体制について感じている課題、「運営に関して」という保健管理センターの運営について感じている課題、「連携に関して」という他機関、他部署との連携について感じている課題、「スタッフに関して」という自分たちスタッフが抱えている課題、「教育に関して」という学生への性教育提供について感じている課題、を抽出した。「教育に関して」はさらに 3 つのサブカテゴリーに分類し、「相談・診療に関して」は 2 つのサブカテゴリーに分類した。

この分析結果を表 7 に示す。表中の抽出数とは、抽出された語句の数を示している。

「学生に関して」のサブカテゴリーの 1 つは「知識・意識」という、学生の知識不足や性に関わる問題への他人事意識、学生の理解度や性意識の確認に関する課題で、2 つ目のサブカテゴリーは「多くの学生への対応」という、相談には来ない全ての学生に対しての対応、学内で少数の女子学生のニーズを知ることについての課題、3 つ目のサブカテゴリーは「利用」という、性の健康に関する講演に学生が集まらないことや婦人科相談の医師が男性のため利用が少ない、キャンセルが多いことに関する課題である。

これら 3 つのサブカテゴリーの中でも特に、学生の「知識・意識」が最も語句が多く、現場で相談にあたる者として、学生の知識不足を感じ、そのことを何とかしなければと考えている様子が窺えた。また、相談に来ない学生への支援はよく課題として言われることではある

が必要なことであり、取り組んでいかなければならないことであると言える。

次に多かったカテゴリーは「相談・診療に関して」である。サブカテゴリーの1つは「相談」という、相談時間・場所の確保や相談を受ける内容の充実に関する課題で、2つ目は「医師」という、女性医師の確保、医師による相談・診察を設けることに関する課題である。これらのことより、女子学生の性の問題に対応する相談や診療を設けようと思っても、時間や場所の確保、また相談にあたる女性医師の確保などが難しい状況が窺える。

挙げられた6つのカテゴリーに分類された課題を見ていくと、予算や人手を確保し、性の健康などに関する相談のための時間や場所、さらに女性医師を確保し、校内での学生の健康を支える意識の連携と学外の病院との連携を築いていくことが必要であり、また学生の相談にあたりながらスタッフの知識の不足を補い、相談に来ない学生への対応を考えなければならない、という一連の流れに基づく課題が見えてくる。こういった課題に直面しながら、女子大学生の性の健康を支えるために取組みを行なっている保健管理センター等では具体的にどのような取組みを実施し、課題に対応しているのか、聞き書き調査を実施した結果から考察を行なう。

(2) 聞き書き調査の結果・考察

9校の保健管理センター等に、聞き書き調査を行なった。インタビューに答えてくださった方は、ほとんどが保健師や看護師の方たちである。学生の来室が多い保健管理センター等は、食堂へ行く道の途中やバス停の前など学生が良く通る場所に設置されていた。

この9校の内、行なっている取組みが他への参考にもなると思われた4つの大学について以下に述べる。

①L大学（私立共学大）

学長が学生の健康に対し高い関心を持つため、保健センターも大きく、どの棟からも学生が集まれるような場所にあった。また、女性医師の婦人科診療・相談も活発であり、婦人科問診票をホームページからダウンロードし、自宅で記入して受診できるようなシステムにしたところ、婦人科の利用が増えたということであった。また、女性の健康に関する内容の自作パンフレットを女子学生全員に配布し、啓発、指導にあたっていた。

②O大学（私立女子大・カトリック系）

学生に健康の情報提供を行なう、ミニワークショップを実施している。企業との提携による婦人体温計の無料貸し出しサービスも実施し、学生が基礎体温を測るきっかけを作っていた。またパンフレットは、入学時に全学生に女性の健康について書かれた既成のものを配布する他、保健室にはNGO、製薬会社から無料でもらえるもの揃え、たくさんの種類があり充実していた。但し、カトリック校のため、直接的な避妊の話は禁止されていた。

③P大学（私立共学大・医療系）

校医が非常勤で高齢なため、女性医師がいる近隣の病

院（婦人科に限らず）を保健師が調べ学生に紹介していた。しかし、保健師1人勤務のため多忙であり、休み時間は保健室に学生が列をなすこともある。学生が訪れやすい雰囲気を持った保健室であるとも言える。

④Q大学（私立女子大・カトリック系）

保護者からの援助金で、健診内容の充実を図り、また女性の健康に関する内容の自作の健康手帳を全学生に配布していた。20年以上前から女性医師の婦人科診療・相談も行なっているが、実施に至るまでには大学管理者、シスター、保護者を説得して理解を得たそうである。

5. 大学において女子大学生の性の健康を支えるための課題と工夫

聞き書き調査から明らかになった、女子大学生の性の健康を支えるための取組みの課題と工夫について述べる。

情報を提供したり、啓発をしたりするために便利なパンフレットであるが、その配布にはパンフレットを購入する費用もかかり、全学生に配布はできないという現状が明らかになった。しかし、このことに対する工夫として簡単な自作のパンフレットやNGOや製薬会社の無料のパンフレットならば経費削減にもなることが挙げられる。

また、学生の性の健康を支える上で重要なコメディカルであるが、業務内容は事務処理が多く1人勤務では出来ることが限られていた。このことに対する工夫としてパートでも事務職員がいるとコメディカルの業務に余裕ができるという実例があった。

学内に常駐してほしいとの学生からの要望が高い女性医師であるが、その確保は人づてが頼りという現状があった。しかし、開業医は診療を抜け出さないと大学に来られないため、非常勤でも勤務してもらうことは難しい実情がある。このことに対する工夫として、女性医師がいる病院の情報をコメディカルが収集し、学生に紹介することでも、学生の要望を満たすことは可能であると考えられた。

一方、大学管理者や教職員、保護者の理解が得られないと個人レベルの対応に限られてしまうという現状については、大学管理者や保護者の理解を得るためには学生の現状をデータと共に示し、説得することも必要であり、その方法で理解を得ることができた実例もあった。

以上述べてきたような工夫には学生の性の健康を支える意志のあるコメディカルの力が大きいですが、コメディカルの適正な配置などは大学の理解もないと困難である。そのためにも、学生の性の健康をタブー視せず、健康の一部として認め、大学全体で支援していく姿勢が必要であると言える。

6. ま と め

- (1) 性に関して困った経験は95名（42％）の学生が持っており、性交経験者の方が有意に高くなっている（ $p<0.001$ ）。性の問題に対する相談や、正しい情報を

入手する場所は大学内におけるサービスへの要望が高い。このことから、性交経験者が増える大学生への啓発とケアは必要であり、大学において女子学生の性の健康を支える事は有効であるといえる。

- (2) 「女性医師による診療・相談」は一部の保健管理センター等での実施に限られているが、コメディカルが独自の取組みや性の問題の相談にあたり対応していた。このことより、性の健康を支える意志のあるコメディカルの存在が鍵といえる。
- (3) スタッフの不足、性の話が学内・保護者間でタブー視されることが、取組みが行なえない理由になっている所もあった。このことから、大学管理者の理解なしに多くの学生への啓発は困難であり、大学管理者に対し、学生の現状から性の健康への理解を得ることが必要である。

本研究は、調査結果を通し、女子大学生は性交経験や性の悩みを抱える性行動の主体である、ということを示唆するものである。その上で、彼女たちの「性の健康を支える」ということは、彼女たちが既に性交経験を持ち、それに伴う性の悩みを抱えている、ということを否認するのではなく、その現実を認め、その上で彼女たちの健康を維持し向上させるために、困った時はいつでも相談にのったり、情報を提供したりするなど、彼女たちが学生生活及びその後の人生を悔いのないよう過ごしていけるように周囲も援助するということである。

そのような取組みは、コメディカル1人の力だけでは

困難であり、大学全体に於いて取り組む意思を持つことが必要である。そして、学生が訪れやすい場所にあり、尚且つプライバシーも保護されている保健管理センターの設置や、保健管理センタースタッフの充実、学生への性の健康に関わる積極的な情報提示、教職員や部署間の連携など、学内の体制を構築していくことが必要である、ということを本研究は示唆した。

引用文献

- 1) 大学・短期大学への進学率の推移. 文部科学省平成19年度学校基本調査速報, http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/07073002/002/sanzu09.pdf
- 2) 原 純輔: 「青少年の性行動全国調査」とその30年. 「若者の性」白書 (財団法人日本性教育協会編), p7-21, 小学館, 東京 (2005)
- 3) 早坂貴美子 他: 大学生における性感染症の実態調査について. CAMPUS HEALTH, 42(1), p114 (2005)
- 4) 忠津佐知代 他: 大学生の性に関する認識の実態とピアカウンセリングへの期待ーピアによる性教育ニーズと教育内容の検討ー. 川崎医療福祉学会誌, Vol.17, No2, p313-331 (2008)
- 5) 剣 陽子: 若者の望む性に関する情報についての質問紙調査. 思春期学, VOL.22, NO.3, p423-429 (2004)
- 6) 山内葉月 他: 青年期女性の産婦人科受診行動に関する研究ー心理的抵抗感と関連要因ー. 熊本県母性衛生学会雑誌, 10巻, p49-59 (2007)
- 7) 前田麻子, 茅島江子: 女子大学生の産婦人科受診に対する認識と行動との関連. 思春期学, VOL.24, NO.1, p159-167 (2006)